



Ivanhoe

Sir Walter Scott

作 ト ッ コ ス

一ホンヴィア

譯 一 只 高 日



版 出 社 潮 新

非賣品

世界文學全集(7)

アイヴンホー

第三十一回配本

昭和四年九月二十日印刷
昭和四年九月三十日發行

翻譯者 日 高 只 一

發行者 佐 藤 義 亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新 潮 社

電話牛込

園
八八八八八
〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番

振替東京 二三、四五〇番

序

「アイザンホー」の名はスコットの名と共に、夙くから我々日本人の耳に親しみがあるにもかゝらず、未だ其の邦譯の一つだに出たのを聞かない。歐洲では此の名作を夫々の國語に翻譯しない國はなく、中には一國にして數種の翻譯を出してゐる處さへある。然るに、日本にだけ只の一種も此の翻譯のなかつたのは、不思議でもあり、殘念でもあり、恥辱でもあると感ずる。其の爲め、私が初め此の翻譯に従事するに至つた時には處女地開拓と云つたやうな快感を覺えたのである。いや、其の後も常に其の快感を懷きながら、譯筆を運んだのである。それにスコットの諸作、殊に「アイザンホー」は青年時代に耽讀したり、後、學校で講じたり、更に先年彼の地に遊學の際、親しく「アイザンホー」の舊跡を探り、スコットの故國に彼の遺跡、遺屋を訪ねたりして、親しみが彌が上に増したので、「アイザンホー」の翻譯は全然、十年二十年の偉大な知己を世に紹介する誇りと、喜びとをさへ感ずるのである。

こんな十年二十年の知己でありながら、「アイザンホー」は時々難かしい言葉で話しかけて、眉を顰めしめることが屢々ある。と云ふのは此の著は百年以上も昔の作であるので、文法や語句の用法が現在とは違つた所がある。中には其の用法が現今の辭書に「古體」として上げてあるのを參照して、初めて解せられるやうな語句もある。殊に厄介なのは各章の冒頭に必ず引用してある詩句や文句である。これは古來の名詩、名文から此の著各章の概意に該當する一小部分を引用したものであるが、何書の何頁、何行とも記さないで、只筆者の名だけ記してあるので、其の前後が分らず、調べるのにも甚だ困難である。尤も中には書名だけ上げてあるのも二三ある。更に困ることに、其の引用句も時々スコット自身が各章の概意に該當するやうに勝手に語句を變へたり、抜いたりしてゐる。チャーサーからの引用句の如

きは其の綴りが現代語のでもなければ、普通のテキストにあるのとも違つてゐるのがある。けれども、丹念に調べて原書に引合せ、其の出所を明かにして、眞意を誤らないように力めた。併し單に「古劇」とか「古詩」とかと記してあつて、探究に手がゝりのないものは、已むを得ず其の儘に譯して置いた。スコットは適當の文句、詩句がない時は、引用句らしく創作したさうであるから、出所の明かにしてないのは、其の類ひではないかと思ふ。

私は尙ほ原意の誤解を防ぐ爲めに、佛譯を二種、參考にした。一は Henri Mansvig の手に成り、一はバリのネルソン會社出版のものである。後者は各章冒頭の引用句は勿論其の他の所にも抜いた所が多い。が、前者は一語一句、忽せにせず、丁寧に譯してある。只各章冒頭の引用句は大意を一二行若しくは二三行に散文譯してあるのみである。間々に引用した詩句には全部抜いた所がよくある。

私はテキストとしてエディンバラ・ニンモ會社版の全集中のものを用ゐた。尙ほ、米國プリンストン大學教授 Bliss Perry の註解のあるテキストと英國の Fanny Johnson 註解のテキストとを參考にした。兩書の註解には相違の所があるが譯者が判じて適當だと思ふものを採用して置いた。けれど各章の冒頭引用句には二書共註解も何も加へてない。想へば私がスコットランドの田舎ツキード河畔に眠れるスコットを訪ねたのは一九二二年八月九日であつた。彼の墓は二〇〇餘年前ノーマン文化移入の最初の遺跡ドライバローと云ふ一廢寺の境内にある。當時の私の日記を見ると書きつけてある。遠き昔を偲び、「アイザンホー」の時代を憶ひ、君を戀ふるまゝに此の拙い譯を君の靈に捧ぐ。

一九二九年九月十九日

東京阿佐ヶ谷にて

譯

者

解 說

近代歴史小説開祖としてのスコット

眞の歴史小説を構成するには先づ歴史上の事實及び精神に對する觀念と嗜好とを有し、かねて、作家自身が生ける時代の個人生活、社會生活、若しくは時代相に對する嗜好と知識とを有し、且つそれを評價し得る能力がなくてはならない。此の點に於てスコットに比すべき者は多くあるまい。彼は幼時から家庭に於て、又スコットランド國境の田舎に於て、古城や古戰場や、又はそれに伴ふ歴史物語や傳説などを目や耳で親しく學んだのである。過去は彼の呼吸に入り、血管に鼓動してゐたので、彼が筆を執るとそれが現はれないでは置かなかつたのである。けれどもそれは單なる過去が過去として表はれたのではない。ドースンの言葉を借りて云へば、「過去の歴史に確乎たる藝術的現實性を與へた」のである。畢竟、スコットは歴史を自分の思想や藝術上の興味に照して變改したのである。彼に取つては歴史小説は自分の抱懷する情操や、思想や、筋や、人物を輝かすやうに集中せられた史實に過ぎない、此の意味に於て歴史は遠心的で、歴史小説は求心的である。フランスの文藝批評の大家テームも彼の歴史小説を斯う評してゐる――

「これ等の昔の情景は悉く嘘である。衣裳や、景色や外形だけは正確であるが、行爲や、對話や感情や其の他凡ゆるものが皆近代の假裝に飾られ、配置せられてゐる。或はスコット自身の性格や、生涯を觀察する時は、其の儘の作中に彷彿してゐるのを感じてあらう。」

實に彼の作中の人物や人生は、過去の人や人生でなくて、彼の周圍の人であり、彼の時代の人生である。テームが又

「彼の作中の人物は如何なる時代の者でも皆彼の隣人である」と云つてゐるのも理^{ことわ}りである。

右の如き態度はシェイクスピアが史劇を作る態度と同じである。プランダ・マシューズが歴史小説の解説を試みるに引用したシェイクスピアの史劇創作態度の評言を借りて言ふと、「シェイクスピアの目的とする所は生きた人間を作るにあつた。——彼は過去のスコットランド人もデイン人も當代の英國人と異ならしめようとはしなかつた。彼が描く人物は當時の觀劇者に親しい言葉や、法律や、習慣や、衣裳を與へたのである。——時代錯誤などは平氣であつた。——彼は自分と同時代の人とシーザー時代の人との間に相違はなかつたかのやうに勝手に作をしたのである。」

スコットはシェイクスピアを非常に愛讀して其の影響を受けることが多かつた。「アイザンホー」の中などでも多くの類似點が歴然として指摘し得られるのは、此の爲めである。彼がシェイクスピアの作劇態度を小説に用ゐるに至つたのも蓋し偶然ではない。

ドースンはシェイクスピアとスコットとを比較して、次のやうに言つてゐる——

「彼は或點でシェイクスピアと同じ事をしてゐるのである。彼は歴史の ^{ワイヴィイケイション} 蘇 生 を企てたのである。彼はシェイクスピアのやうに偉大な人物を周ぐる幾つかの而も多少確實な傳説を取扱ふのである。兩人の作は何れも、既に多く知れてゐる人物を捉へて解説するのである。而して、それに要するのは發明力でなくて、既知の材料を解説するに要する創造的想像力である。スコットは此の種の想像力を殆んどシェイクスピアに劣らない程有してゐる。吾々がシェイクスピアの史劇とスコットの歴史小説とを比較する時には其の精神に於て、兩者の眞に類似してゐることを感ずるのである。更に又中心人物を表現するに當つて、兩者の創造力の等しいことも感ずるのである。此の點こそスコットがシェイクスピアに匹敵すべき唯一の點である。」

實に彼の創作態度は過去に材料を求めながら、其の底に注ぐのに生きた實人生の血潮なり命なりを以てしたのである。彼の作がシェイクスピアの如く何時迄も生命を有し、愛讀せられるのは畢竟此の爲めである。

以上のやうな創作態度を歴史小説に用ゐた者はスコット以前に未だ嘗てなかつたのである。彼が近代歴史小説の鼻祖と仰がれるのもこの故である。獨逸のサア・ラールタ・スコットとして推賞せられるエーリングや、フライターフや、エーベルズや、伊太利のマンツォニヤ、フランスのギニヤ、メリメや、「ノートルダム」を書いたユーゴーや、「モンテクリスト」で日本にもよく知られてゐるデュマ(椿姫を書いたデュマの父)や「コオ・ブデイス」で有名なポーランドのセンキーツなどを初め、魯、獨、佛、伊、西等歐洲諸國の近代歴史小説家は何れもスコットの感化を受けないものはない。彼はあらゆる階級のあらゆる人にも同情を寄せたのである。最も卑賤な人、虐げられた者にも、萬斛の涙を注いだ。此の偉大な點に於てもシェイクスピアに酷似するものがある。

尙ほ附け加へて云へば、彼が普通歴史小説家と異つてゐる特徴の一つは彼が人生と自然とを巧みに織り交ぜてゐる點である。英國の小説家で親しく研究した自然を自己の作の根本要素の一とした開祖である。だから彼の作の眞の妙味は彼の作の根柢をなしてゐる人生と、その背景となつてゐる自然とを併せ味讀することによつて、初めて得られるのである。

「アイヴンホー」に就いて

「アイヴンホー」は以上述べたスコットの特色を非常によく現はしてゐる代表的傑作である。其の爲めか、彼の作中最も廣く最も長く愛讀せられ、彼が在世中の如きは發行部數に於て、此の作が最頂點を示したとのことである。スコット

の傳記作者で有名であるロックハートも斯う云つてゐる。——『アイザンホー』の出版は同時代文學的愛好物として、スコットの生涯に最も輝かしい時代エポックを劃したのである』と。爾來百餘年後の今日に至つて、依然として、年々幾種類かが刊行せられ、或は各國語に翻譯せられて、廣く多く世界に愛讀せられてゐる。

「アイザンホー」は歴史小説を書き初めてから六年目、十巻目に當る作である。彼のこれ迄の歴史小説九巻は悉くスコットランドの材料、而も當時より二三代前の事を取扱つたのであるが、此の作に至つて初めて、イングランドを材料にして、而も十二世紀の事を取扱ふやうになつたのである。これは、何時もスコットランドの材料ばかりでは讀者を飽かしめる恐れがあると思つたのでなく、新天地に筆を驅らんとする藝術家的自然の欲望から發したのである。「アイザンホー」の成功よりして彼はイングランドは勿論、稀にはフランスの歴史に迄新材料を要めるに至つた。

「アイザンホー」の描く舞臺は前述の如く、イングランドで、時代は十二世紀（日本の源平北條時代に當る）である。英國の此の時代を理解する爲めには、それに關するだけの英國の歴史を極簡單にでも知らなくてはならない。元來イングランドはブリトン人が住んでゐたのであるが、紀元四四九年（仁德天皇より三代後允恭天皇の在位中）歐洲の北方から、アングロ・サクソン人が攻め來り、遂にブリトン人を征服して、此處に王國を建て、アングロ・サクソン文化を生んだのである。今日の英國民の特性、英國文化の基礎をなすものは此のアングロ・サクソン民族であつて、今日の英語も亦アングロ・サクソン語が根幹となつてゐるのである。所が一〇六六年對岸のノルマンディのキリアム公は、大軍を率ゐて、英國海峡を渡り、ヘイスチングスの一戦にアングロ・サクソンの最後の王ハロルドを殺し、遂に英國を征服して、其の王となつた。キリアム第一世即ちキリアム勝利王と云ふのは此の王の事である。

ノルマンディとは佛國の西北部に當り、英國海峡に臨んだ一地方で、今はそんな國はないのであるが、當時は此の地方に一國をなして、其の勢力當るべからざるものがあつた。元來ノーマンディ王國を建設したノーマン人は元スキヤンディナギアの海賊であつたのであるが、紀元九〇〇年の頃黒船に乗つて、セーナ河を溯り、其の沿岸を侵略し、パリに向つて攻め寄せて來た。そこで、フランスは北西の廣漠にして豐穰な地方を彼等に與へて、和を結んだ。乃ち彼等は此の地方に國を建て、ノルマンディと稱したのである。彼等は自分の特性を有ちながら、フランス文化を接取して、我が物とした。殊に彼等はフランス人と結婚して、血族の上に於て民族發展の實を擧げた。そしてフランスの風俗、習慣、言語等を受け入れ、僅か百年餘にして、嘗て野蠻未開の海賊であつたノルマン人は歐洲中最も進化發展した種族となつた。即ち彼等は本來有する北歐の武勇を依然保ちながら、南歐の柔軟性、融通性、藝術文學の愛好性、更に理知、才氣などを吸収し、自分等の政治を組織し、支配する天才を發展させたのである。

此の様な民族が英國を征服し、自分等の領土とするや、彼等はフランスの文化、文學、言語、風俗、習慣を盛んに輸入した。征服後半世紀も経たない中にアングロ・サクソンの貴族や郷士などはノルマン人に其の位置を奪はれ、教會はフランスの僧や説教者で充^みたされた。これ迄アングロ・サクソンの使つてゐた英語は最早、學問や文學の上に重きをなさなくなつた。宮廷や、陣中や、城中や、學校や、議會や、法廷などではフランス語のみが用ゐられた。修道院や教會では、讀むにも、書くにも、對話にさへラテン語が用ゐられた。だから一三〇〇年頃迄は英語で書かれた散文も詩も殆んどない、大抵はフランス語で書かれたものである。併し、英語はサクソン人、殊に下層階級即ち一般民衆の用ゐる言葉であつて、後には貴族即ちノルマン人の子供さへ、屢々民衆に接觸する機會の多い所から段々に英語をも用ゐるやうになつた。併し其の英語は前よりも非常に變つた姿のものとなつた。即ち多數の民衆語であるアングロ・サクソン語

が其の根幹となつたけれども新來民族の用ゐる言葉に影響せられて其の文法に大變化を來し、其の語數は大増加を來した。かうして今日の近代英語は生れたのである。更に又兩民族の結合、融合から驚の敏捷さを牛の強健體に注ぎ込んだやうな、今日の英國民族が生じたのである。尙ほ、當時の社會相の最も特徴あるものを二三左に擧げて見よう。

封建制度——ノルマン人征服後の英國社會相の根本特徴は封建制度の確立であつた。以前とてもなかつたのではないが、未だ其の色が極めて薄かつたのである。一體封建制度とは國王が其の土地を所有し、武功に従つて、其の臣下に土地を分與する制度である。言葉をかへて言ふと封土と名づける土地を武人が所有する社會制度である。キリアム一世は英國征服後、總ての民有地を沒收して、國王の所有とし、これを分割して、臣下のノルマン貴族に封土として與へた。

十字軍——マホメット教徒の手から、聖地、エルサレムを取り返さんとして、基督教徒は歐洲各地に奮ひ起つて、マホメット教徒サラセン人と戦つたのである。其の戦に臨む武士は皆胸に赤十字の印をつけたので、十字軍と云ふのである。英國民も亦基督教徒として、これに参加した。其の第一回は一〇九五年即ノルマン征服後三十年足らずである。かくて、戦を重ねること七回、時を閲すること二百有餘年に及んだ。此の戦に参加した多くの貴族は、多額の軍用金を作る爲めに、自己の財を投じ、猶太人などから資金を調達せしめさへしたのである。

武士道——當時、人が王侯貴族に臣事し、武士の階級に屬するやうになると、誓ひを立て、武士道の奉ずる信條を守るのであつた。その信條とは武勇にして、禮讓を尊び（敵に向つても）、婦人を重んじ、正義にくみし、弱きを助け、約束を守り、公平を貴び、名譽を重んずると云ふことである。併し此の武士道も十二世紀の頃には段々墮落して殘忍、暴虐、悖德などに陥るやうになつてゐた。

宗教と武士道との交渉、——此のやうな時代であつたので宗教と武士道とは互に交渉し、僧侶も武道を練れば、騎

士も宗教に奉仕して、寺侍團の如きものまでも生ずるに至つた。尙ほ中世紀は宗教が墮落して其の權威を失ひ、僧侶生活の如きも腐敗して、世人も餘り意に介しない程になつてゐた。

スコットは十二世紀に於ける以上の社會相、時代相を根柢として、幾多の歴史上の事件或は然らざる物を前述の創作態度で取捨配合して、「アイザンホー」を創り出したのである。斯う云へば、一見、六七百年前の世界を其の儘表現したやうであるが、^{つまびら}審かに検討して見ると、六七百年後に於ても尙ほ躍動する血潮が脈々として流れてゐるのを感じるのである。由來、ノルマン民族とアングロ・サクソン民族とは融合して一新民族を生じたのであるが、英國の歴史上に流れる貴族的、封建的氣分はノルマン系統の遺物であつて、デイモクラチックな、非貴族的精神、尙ほ言葉^{ことば}を換へて云へば、英國の歴史を常に民衆的特徴を以て色づけて來たものは「アイザンホー」の中に流れてゐるアングロ・サクソン魂、であることを忘れてはならない。尙ほ其の中に近代の個人生活、社會生活等が如何に表現してあるかは前に述べた作者の態度なり、特長なりをよく證してゐるのである。

スコットはシェイクスピアとは異なり、創作の材料を種々の方面から借り來り、これを時代相、社會相の中に配列し、整頓して、展開させて行くのである。其の二三を例示してみよう。

「アイザンホー」の名は正史上にはないものである。スコットが此の作の序文に書いてゐる言葉には斯うある――

『「アイザンホー」の名は古歌に暗示を受けてつけたのである。一體小説家は何處からかよい名を得たいと思ふことがどうかするとある。私も、さう云つたやうな時に、ふと心に思ひ浮べたのは、有名なハムデンの祖先がテニス試合の時に、ラケットで黒裝王をなぐつた爲めに、沒收された領地の名前三つであつた――』

ハムデンはなぐりし爲めに

ツリング、ウキング、更に又

アイザンホーを失へり。」

それから以上の三つの中で最後の「アイザンホー」が、古代英語の響を持つてをり、且つ、物語の底を豫め割つて見せるやうな所が少しもないので、それを選んだと云ふ意味の事を言ひ足してゐる。

此の如く、アイザンホーとは元來領地の名である。で、「アイザンホーの領主キルフレッド」と云ふのが、此の作の主人公の正しい名前である。が、これを略して、單に「アイザンホー」と云つたのである。

ワンバ、——これはシェイクスピアのリア王の幫間フイムから思ひついたものらしい。セドリックに忠勤を盡し、滑稽を演ずる中にも、誠實と眞理を暗示するところなど慥にリア王のフルの再來と云ふ感を起さしめる。

浪士や、ロビンフッドなども、正史にはなく「ロビンフッド物語」から借り來つたものであるらしい。

アイザックとレベッカとは此の物語中、大なる役目を演ずるのであるが、これはシェイクスピアの「ゼニスゼニスの商人」中のシャイロックとゼシカとから思ひついたのであると思ふ。

ジョルジールの僧院長などはチョーサーの「カンタベリイ物語」の序曲に出て來る旅僧に暗示を得たらしく思はれる。

作中最も確かに史實に即してゐるのは獅子心王、リチャード王とジョン親王とである。併しそれすら前者は正史よりも「リチャード、獅子心王」と云ふ物語に據る所が多いやうに思はれる。後者は最も正史に忠實のやうであるが、それも矢張り、シェイクスピアの「ジョン王」から暗示を得た所があると思ふ。

「アイザンホー」を讀んで最も近代的意識の現れを感じるのは猶太人アイザックとレベッカとの取扱方である。讀者は

誰でも此の二人の描寫敘述を読む時、シェイクスピア作「ゼニス商人」中のシャイロックとゼシカとを、思ひ起すであらう。同時に此の兩者を比較する時、アイザックがシャイロックより如何に遙かに近代意識に依つて取扱はれてゐるか、又作者が彼の口を借りて、如何に迫害者の非を鳴らしてゐるかを感得するのである。殊にレベッカに至つては、逆もゼシカの比でなく、スコットの理想の女ではないか、或はスコット自身の理想を彼女をして表現せしめてゐるのではないかと思はれる程に立派の女である。其の間に何等人種的偏見なく、スコットの種族を超越した燃ゆるやうな人類愛が彼女を通して迸り出てゐるのを感じるのである。

又、此の猶太人を思ふ時、ゴルズワージーの作「色々の忠節」中に出て来る現代的シャイロックと稱されてゐる猶太人デ・レギスを思ひ起さざるを得ないのである。ゴルズワージーは愈々近代的で、愈々種族的偏見に捉へられない人類愛に彼を取扱つてゐるのである、即ち英國人を死なしめて、却つて猶太人に勝を得しめてゐるのである。彼は此の作に於て、人が階級に忠であつたり、種族に忠であつたり、國に忠であつたり、職に忠であつたり、法に忠であつたりするが、それは廣い人類愛とか正義觀からすると寧ろ偏狭で人類を害することが多い、よろしくこれを超越しなくてはならないといふ意味の教訓を現はしてゐる。スコットも亦「アイザンホー」に於て、種族的偏見、宗教的偏見、階級的偏見等を廣い人類愛の眼で批判してゐるのである。

スコットの作を評する者、多くは性格描寫に缺けてゐると云ふ、これは個人意識を根柢とする文學論の唱ふる所であつて、今日の如く、社會意識を根柢とし、社會相、時代相を描くを以て、文學の正道と見る時は、「アイザンホー」は如何に多くの教訓を文學上に與へることであらう。

スコットは其の書き出しに於て、物語の展開する時代や舞臺を明かにする爲めに、くだ／＼しく筆を弄するので、讀

者をして、倦怠を感じしむる傾きがある。「アイザンホー」も亦其の例に洩れず、最初の一章は欠伸を催さしめるかも知れぬが、それを讀むことは後章を即ち物語全部を理解するに極めて必要であると思ふから、讀者はそれを辛抱しなくてはならない。一度此の關所を通過すると、場面なり事件なりが刻々に展開して、興趣愈々湧き、時の經つのを忘れて巻を終るを知らざらしむるのである。

ダ・クキンズイに就いて

彼は一七八五年八月十五日、英國マンチェスタに生れた。彼の父は富裕な外國貿易商人であつたが文學好きであつた。彼の母は人格の高い、賢明な婦人であつたが、嚴格に過ぎ、同情の念に乏しかつた。一は彼の天性からであるが一はかうした母の態度から彼は非常に臆病で、ひっこみ勝であつた。其の爲めに彼の目は兎角内に向ひ想像が豊かで、夢想に耽ることが多かつた。彼が七歳の時父は年額千八百パウンズの收入ある財産を遺して死んで了つた。それから小學、中學に學び、年十六歳の時、マンチェスタの中學校に在學中、其處の寄宿舎を脱走して北エイルズ地方を徘徊し、旅金が盡きてからは手紙の代筆をして金を獲たり、人から恵まれたりして、口を糊し、時には野宿したり、デブシイのテントに寝たりして夏を過した。冬になつてロンドンに行き、殆んど乞食同然の生活をしてゐたが、彼は強情で母に助を乞ふなど決して快しとしなかつた。が彼の現狀が故郷に知れ、遂にオックスファド大學に入れられた。在學中多くは他の學生と交らず、只管獨逸の哲學、文學、英文學上古來の大作などの研究に耽つた。在學中顔面神經痛及烈しい齒痛を醫する爲めに少量の阿片を用ゐる始めた。大學在學中ワーズアス、コールリッヂの二大詩人を甚く敬慕し、遂に兩詩人に近づき、二十五歳大學を去つてから湖水地方に移り、右の二詩人及スコットなどとも交遊を結んだ。二十九歳

の時烈しい胃病に悩まされ、日頃用ゐてゐた阿片の量を甚く増し、其の爲めに色々恐ろしい経験を嘗めた。金に困つて、一時地方新聞の記者となつたが、眞に文學的生活に入つたのは彼が三十七歳の時であつた。即ち彼が「ロンドン・マガジン」に筆を取り初め、彼の名作「阿片喫煙者の告白」を掲載し初めてからである。これから彼は名聲が世に高くなり、雑誌記者として頭角を現はすに至り、種々の雑誌に筆を執るやうになつた。彼の全集が殆んど完成せんとする時病に冒され、遂に七十五歳にして他界した。

彼はコールリッチと共通點が多く、兩人共に獨逸の文學哲學を英國に輸入することに於て大なる功績を舉げた。彼は後の二大論文家マコーレイ、カーライルの直接の先驅者である。ラムやハズリットや、シドニー・スミスなどと共に批評壇に一時代を劃したエッセイストである。

彼は一面智見が細微を穿つのであるが、他面情熱的、空想的であつて、其の表現は詩的にして、音樂的である。彼の作中評論以外殊に傑出したものは「阿片喫煙者の告白」を初め、「美術滅却としての殺戮」、「驢韃種族の逃亡」、更に「復讐者」の四篇である。

右の中「復讐者」は彼の作中唯一の奇抜な短篇小説である。それは實に身の毛もよだつやうな恐ろしい、不思議な殺戮が續々と起り、實に氣味の悪い慘劇が演ぜられるが、それは英國人と猶太人との混血兒の金持が自分の家族及母に侮辱を加へたり、迫害を與へたりした人々に對して祕計を以て續々と殺戮を加へ復讐するのである。此の燃ゆるやうな強い復讐心に交ふるに熱烈な戀愛を以てする。此の二大本能を美しく織り交せて、人心の機微を現はすところに作者の非凡な才筆を覗ふことが出来る。

スコット年表

- 一七七二年 八月十五日スコットランドの首府エディンバラに生る。
- 一七七三年 病の爲めに右足跛となる。
- 一七七四年 病弱の身を養ふ爲め、祖父の農園に行く、山河の景色や動物などを非常に好むやうになり、殊にその田舎に残つてゐる古城を訪れたり、それにかままる傳説や物語歌を聞くことを好んだ。
- 一七七九年 エディンバラ・ハイスクールに入る。
- 一七八三年 エディンバラ大學に入る。
- 一七八五年 父の法律事務所に入り、法律を勉強す。
- 一七九二年 辯護士になる。
- 一七九六年 獨のビュルゲル著「レノール」と云ふ物語歌集の英譯を出す。
- 一七九七年 義勇農騎兵隊に入り一春を其の訓練に送る。
- 一七九九年 スコットランド、セルカークシャーの奉行代理に任ぜらる。ゲーテ著「ペルリヒンゲンのゲッツ」の翻譯を出す。
- 一八〇〇年 「聖ジョンの逮夜」と云ふスコットランド國境の

- 物語歌を出す。
- 一八〇二年 「スコットランド國境の吟誦歌」を出す。
- 一八〇五年 「最後の吟遊樂人の小唄」を出し、好評を博す。
- 一八〇六年 大審院の書記に任ぜらる。物語歌及抒情詩集を出す。
- 一八〇八年 「マリーミオン」を出す。
- 一八一〇年 「湖上の美人」を出す。
- 一八一一年 「ドン・ロ德里ックの幻」を出す。
- 一八一二年 新邸アボッツファドに移る。
- 一八一三年 桂冠詩人に推舉せられたが、辭して詩友サウジに讓る。「ロックビー」及「ツライメンの婚禮」(別名聖ジョンの谷)を出す。
- 一八一四年 近代歴史小説の最初の作「エイヴリイ」を出す又「スキフト傳」及「國境の遺物」を出す。
- 一八一五年 「島の領主」(詩)「ガイ・マンナリング」、「ワールターの戰場」(詩)、等の諸作を出す。
- 一八一六年 「ボールが親族に送つた手紙」、「好古家」、「わが地主の物語」、「黒い侏儒」、「オールド・モータリチイ」等の諸作を出す。
- 一八一七年 「ハロルド・ザ・ダーントレス」(詩)を出す。烈しい病氣に罹る。